

京都大学人文科学研究所新型コロナウイルス感染防止などの 行動自粛にともなう共同利用・共同研究拠点企画報告書

1. 国際研究ミーティングの名称

国際ワークショップ: 中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの

2. 主宰責任者氏名

外村 中(ヴュルツブルク大学上級講師)

3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

日時: 2021年3月28日(日) 13:30~18:00

場所: 京都大学人文科学研究所分館考古芸術共同研究室及びオンラインミーティング
研究発表①

演題: 道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの: 「一なる」ものは「道」か「気」か

報告者: 外村 中(ヴュルツブルク大学上級講師)

研究発表②

演題: 仏像と道教像の図像的關係性再考 — 南北朝~唐時代 —

報告者: 齋藤龍一(大阪市立美術館学芸員)

研究発表③

演題: 道学諸派における『太極図説』解釈

報告者: 福谷 彬(京都大学助教)

研究発表④

演題: 北宋真宗期の仏教美術と三教理解 — 舍利莊嚴を中心に —

報告者: 稲本泰生(京都大学教授)

4. 概要(400字程度)

本ワークショップは、人文科学研究所の共同研究一般 A 班: 『見えるもの』や『見えないもの』に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究(班長: 外村中、副班長: 稲本泰生)の関連企画であり、当該班の過去 2 年の研究成果を総括するとともに、これからの展開の可能性をさぐり、広く国内外に発信する場と位置づけている。具体的には、これまで個別に検証してきた仏・道・儒に日本神道を加えた四教の「交渉の様相」に焦点をあて、彫像や画像などの文物と対照させつつ考察を加える機会とする。ワークショップは人文研を拠点にオンラインミーティングで実施し、四人の研究者が四教それぞれに軸足をおいた研究発表を行って問題提起し、これに基づいて多分野の研究者が参加して討論を行う。その最大の目標は、当該テーマに関わる諸問題について、ジャンルの垣根をこえた国際レベルの共通認識を形成することに存する。

5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

学外 横手裕(東京大学人文社会学系教授)、藤岡穰(大阪大学文学研究科教授)、塚本明日香(岐阜大学地域協学センター助教)、王杰(京都市立芸術大学美術学部 DC)、大平理紗(京都府立大学文学研究科 DC)、肥田路美(早稲田大学文学学術院教授)、原口志津子(奈良大学文学部教授)、大西磨希子(佛教大学仏教学部教授)、西林孝浩(立命館大学文学部教授)、中安真理(同志社大学文化情報学部准教授)、濱田瑞美(横浜美術大学准教授)、藤井淳(駒澤大学仏教学部准教授)、高橋早紀子(愛知学院大学文学部講師)、篠原典生(中央大学総合政策学部助教)、鈴木洋保(京都女子大学非常勤講師)、重田みち(京都芸術大学非常勤講師)、ベッティーナ・ゲーシュ(関西大学非常勤講師)、魏藝(龍谷大学大学院

文学研究科研究生)、稲葉秀朗(早稲田大学文学学術院 DC)、清水健(東京国立博物館主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館教育室長)、岩井共二(奈良国立博物館美術室長)、折山桂子(九州国立博物館アソシエイトフェロー)、田中健一(文化庁文化財調査官)、長谷川貴信(京都府教育庁指導部文化財保護課技師)、齋藤龍一(大阪市立美術館主任学芸員)、森橋なつみ(大阪市立美術館学芸員)、八田真理子(岡山県立美術館学芸員)、中澤菜見子(石川県立美術館学芸員)、瀧朝子(大和文華館学芸部課長)、西谷功(泉涌寺宝物館学芸員)、外村中(ヴェルツブルク大学上級講師)、シビル・ギルモンド(ヴェルツブルク大学講師)、イマヌエル・スパー(ヴェルツブルク大学講師)、黄盼(中国社会科学院 PD)、常钰熙(北京大学考古文博学院 DC)

学内 上島享(文学研究科教授)、内記理(文学研究科助教)、檜山智美(白眉センター特定助教)、陳佑真、臧魯寧、王歆、王孫涵之、富岡采花(以上、文学研究科 DC)

所内 稲本泰生、安岡孝一、古勝隆一、倉本尚徳、向井佑介、高井たかね、福谷彬、高志緑

6.助成金の使途等

日本入国時における二週間待機の措置が継続される等、主催責任者の滞在費が想定をこえた価格となったため、全額を旅費にあてた。

7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

3月28日のワークショップ当日は6名の外国人研究者を含む52名の参加を得て濃密な研究発表と活発な質疑応答が行われ、実りある研究交流の機会となった。開催に先立って『仏教と道家系の「見える」ものと「見えない」もの』と題する資料集の冊子(全100ページ)を制作刊行し、議論の参考に供することができた。

本企画の基盤となっている研究班(A班)は2021年度が最終年度であり、研究成果をとりまとめた論集の公刊に向け準備にあたるが、論集にはワークショップの発表に基づく論考も収録する予定である。

また当該班の関連企画としてドイツ・ヴェルツブルク大学で日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を開催すべく、ドイツ研究振興協会(DFG)と日本学術振興会(JSPS)の助成に応募したところ(ドイツ側代表:外村、日本側代表:稲本)、採択の通知(2021年3月初)があり実施が確定した。本セミナーは2021年12月10・11日に行われ、若手・中堅研究者の班員7名が研究発表し、同数のドイツ在住研究者と対論する。3月のワークショップのメンバーの中では福谷が研究発表、外村・稲本が総括・進行を行う予定である。本セミナーの最大の目標は、伝統東アジアの文物・芸術を解釈するための共通基盤が、若い世代の間で、また国際レベルで形成されることに存する。今回のワークショップ参加者には若年層が多く、一方で発表・討論では高い水準が確保されていたことから、セミナーの成功を確信させる手応えが得られた。

参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
学内(法人内)	3	16 (5)	4 (1)	9 (4)	8 (4)	5 (2)	()	()	()	()	()
国立大学	3	3 (1)	()	1 (1)	()	()	()	()	()	()	()
公立大学	2	2 (2)	1 (1)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	()	()	()	()	()
私立大学	13	14 (9)	2 (2)	3 (2)	2 (2)	2 (1)	()	()	()	()	()
大学共同利用機関法人		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
独立行政法人等公的研究機関	8	10 (4)	()	6 (4)	4 (4)	()	()	()	()	()	()
民間機関	2	2 (1)	()	()	()	()	()	()	()	()	()
外国機関	3	5 (3)	4 (3)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	()	()	()	()	()
その他		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
学外 計	31	36	7	14	10	6					
計	34	52 (25)	11 (7)	23 (15)	18 (14)	11 (7)	()	()	()	()	()
【その他の参加状況】											

※本務所属が海外の研究機関である研究者

※()内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に()で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください

国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した:受入人数2人、延べ人数6人